みちのり シリーズ⑬

田中　修さん

1941年11月21日、大阪市生まれ　尼崎市在住

突然同級生から日本人と言われた

私は自分が日本人だとは全く知らなかった。

哈爾浜市香坊区で優しい養父母と3人で、暮らしていた。養父母は二人で飲食店を営んでいたが、店をたたみ父は清掃の仕事、母は飲食店で働き始めた。生活は比較的裕福で私は大切に育てられていた。養父母を疑うこともなく学校に通っていたが、高校生の時、突然同級生から私が日本人だと言われ驚いた。

兄から聞いた私の出生と家族

兄の話によると、私の家族は大阪府の吹田で暮らしていた。私はそこで1941年11月21日に生まれた。5人兄弟の下から2番目だった。

父は大工だったが、召集され何度も中国や満州に行きその頃、開拓団に加わり満州に行くことを決めた。

43年、大阪から送り出された昇平開拓団に加わり、ハルビンの西、濱江省肇州県昇平鎮に入植した。父は入植した次の年に亡くなり、母は1人で開拓団の共同作業に参加した。45年8月、日本が戦争に負けた時、開拓団はどしゃぶりの雨のふる泥道を鉄道の通っている安達に逃げ、多くの人が亡くなる中、私の家族は馬小屋で暮らした。12月になって、列車でハルビンに出て、花園小学校に収容された。

母は兄弟には知らせず、私と弟を中国人に預けた。その時から私は香房に住む養父母と暮らすことになった。その後、母は収容所で亡くなった。日本に帰国できたのは姉と兄だけだった。私と同じく中国人に預けられた弟もその後亡くなった。

勉強が好きで大学へ行ったが

日本人であることを知った私は驚くとともに、当時自分が日本人であることを恥ずかしいと思った。その後は「小日本鬼子」と言われ、いじめられたが、じっと耐え勉強をした。

勉強は好きだったので養父母に励まされ、ハルビンにある大学・東北農学院に入学した。

しかし、専攻学科である農業機械生産機械に興味が持てず、友人と二胡の演奏に夢中になり、自宅で演奏したりしていた。結局、友人3人と大学を中途退学し、哈爾浜市内の運送会社に就職し経理の仕事をした。

5人の子宝に恵まれた

結婚したのは21歳の時だった。養母が妻の兄と同じ食堂で働いていたので紹介された。そして養父母の家で4人で暮らした。その後2男3女が生まれ、家族9人で賑やかに暮らしていた。

残留婦人が帰国の橋渡し

当時、日本に帰る気持ちはなかったし、帰ることもできなかったが、日中国交が回復した後、日本のことを意識するようになった。その頃、近所に住んでいた残留婦人が日本に里帰りし、国や大阪府に私のことを「近所に残留孤児が住んでいる」と伝えてくれ兄が私を探していることを書いた新聞記事を見せてくれた。その時から日本に帰ることを考えるようになった。

79年10月、兄が手続きしてくれて日本に一時帰国した。その時、子どもは18歳を過ぎると帰国しにくくなるから18歳になる長男と15歳の次男を連れて帰るようにと、兄は言ってくれた。私は二人の子供たちといっしょに「日本を見に行こうか」という程度の気持ちで一時帰国した。

兄の説得で永住を決意

しばらく兄のところに滞在しているうちに、兄は身元を引き受けるから、このまま日本残るようにと熱心に私を説得した。中国に養父母や妻子がいるので、永住は無理と思ったが、兄の強い勧めで永住する気持ちが強くなった。息子2人とそのまま日本残り、永住帰国した。兄家族の近所に住み、親子3人で暮らした。日本語がわからなくて困り、自立指導員の勧めで、生活保護を受けながら大阪の日本語学校へしばらく通った。

はじめに新聞配達の仕事をしたが、間もなく自立指導員の紹介で尼崎の旭硝子で働いた。中国で高校生だった長男は学校には行かず働いた。次男は尼崎の公立中学校へ中途入学した。病気や生活で困った時は、兄が助けてくれた。一方、妻はハルビンで養父母と3人の子供たちと暮らしていたが、養父が亡くなり、その後街の工事で家が解体されたので、養母は自分の兄弟の所で暮らすようになった。91年、妻は子供2人と共に来日し永住を決めた。チチハルの医科院を卒業し病院で働いていた長女も92年に日本に永住し、13年ぶりに家族7人全員が揃った。

妻が一家の大黒柱

私は旭硝子で働いていたが、持病が頻繁に起こるようになり、92年に働けなくなった。子供2人はまだ学業途中だったので、妻は永住直後から古着屋で働き、その後はパン屋で働き生活を支えてきた。今は中国残留邦人への支援給付を受けながら、趣味の書を書いたり、歴史書を読んだりし、夫婦で尼崎日本語教室にも通っている。

（聞き手　宗景正・田村博志）

お知らせ・ご案内

第５回中国残留日本人への理解を深める集い

◆日時：2019年１１月30日（土）１３時～１６時

◆場所：尼崎市立中央北生涯学習プラザ

◆内容：中国残留日本人の歴史を語り継ぐ～

残留孤児になった弟を支援してきた兄の証言（仮題）

交流の広場

年々交流が活発に　―新年交流会―

この日、会場はたくさんの人で溢れかえった。明石、神戸、宝塚、伊丹、尼崎、大阪そして八尾から157名が集まり、中国の「春節」のころに毎年行われる新年交流会が、2019年1月26日（土）尼崎市立中央公民館大ホールで賑やかに催された。

コスモスの会代表宗景正氏による開会のあいさつに続いて、日中友好協会兵庫県連事務局長上田雅美氏が祝辞を述べられた。尼崎市議会議員林久博氏の乾杯の発声で、一斉に美味しいひとときが始まった。

今年の料理は格別だ。いつもの水餃子に加え、肉団子の酢豚風、蒸し鶏、特製春雨サラダと、全てが手作りの素晴らしいメニューだ。というのも、中華料理のプロだった学習者が料理長として大いに腕を揮ってくれたのだ。

朝9時には調理室に食材が運び込まれ、メニューごとに仕分けされた。40人余りが料理長の指示で野菜を切ったり、粉をこねたり、湯がいたり、揚げたり、炒めたり、手際よく調理していく。本場中国の味付けは、学習者の皆さんに任せる。会場設営担当者たちが重たい机や椅子を次々と運び、並べ終わったころ、美味しい料理も出来上がった。

たくさんのお料理が手際よく調理されていきます

しばらくの歓談の後、いよいよ参加団体による演芸披露会である。太極拳や太極扇、広場ダンスに歌、なんと皿回しの妙芸まで飛び出し、会場は大いに沸いた。楽しい健康の会のメンバーは全員真っ赤なコスチュームで、歌と元気いっぱいの広場ダンスを披露した。中国のコマ回しや京劇の唄など、飛び入り参加も多くあっという間に時間は過ぎた。最後に全員で「北国の春」と「365歩のマーチ」を歌ってから、会場内所狭しとヤンガーを踊り盛り上がった。

交流の締めは恒例のヤンガー踊り

閉会式で福祉相談支援課林弘之課長は、帰国者と支援者が集い合い、料理や食事を共にし交流することの大切さ、素晴らしさを述べられ、こうして、大勢で楽しんだ新年交流会はお開きとなった。

お忙しい中ご臨席くださった来賓の皆様、料理や会場設営等にご協力頂いたすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

（田中いずみ）

文化交流教室

絵手紙教室

1月12日

講師は濱崎敬子先生

「テーブルの上の野菜や果物を見て、鉛筆と水彩絵の具で、思い思いの絵を描いてもらいました。基本は、①はがきからはみ出すように輪郭線を大きくゆっくりと描く②色を素早く置く③言葉を添える等です。

初めてなのにみなさん随分絵心が有ると思いました（濱崎）」

学習者さんの作品を紹介します。

（ミカンをむいた絵）

「アーンして　パパ」

牡丹　前山　美恵子

（赤カブの絵）

「何　作ろう」

バラ　陳　永海

（緑のピーマンの絵）

「スキ」

バラ　石井一郎

文化交流教室作品を発表会に展示しました

柔軟体操教室

2月10日

講師は神田眞佐江先生

最初はさまざまな健康体操で、身体を思いきり動かして後半音楽に合わせて練功十八法をしました。

「最初身体がすごく硬くて、少し痛みもありました。今やり方も分かって、たまに家でもしています。気持ちもすっきりします。これからも続けたいと思います」

「体操はしたい。転ばないようにバランスとりや、筋肉をつける練習を家でもしたいです」

「汗をかいて、身体が軽くなり、楽しかったです」

「みんなと一緒にやりました。身体が痛いけど、気持ちが良かった。この活動は健康のため、できればまたやりたいです」などの感想がありました。

「生け花教室」男性の参加者が増えました

フラワーアレンジメント教室

3月12日

講師は吉村清美先生

参加者は31人とたいへん盛況で、一世の学習者が大勢参加されました。基本を聞いてからそれぞれに取り組みました。回を重ねてきたので、みなさん腕が上がった感じです。出来上がったみずみずしい作品は、学習発表会の舞台や会場を飾りました。

「嬉しい、花好き、きれい」「花をきれいにいけました。楽しかった。いろんな花はきれい。良かったです」「花を見ると春が来る気持ちを実感しました。自分で作ったものはよくないですが、子供のようにかわいいです」などの感想がありました。

（藤田順子）

発表舞台に並んだフラワーアレンジメント作品

主な行事

1月　絵手紙教室
　　新年交流会
2月　柔軟体操教室
　　講演会（徳田さんの体験に学ぶ）
3月　フラワーアレンジメント
　　学習発表会
5月　生け花教室
　　日本語ボランティア研修会（1回目）
6月　第8回コスモスの会総会
　　絵画教室
　　日本語ボランティア研修会（2回目）
　　映画会